自分にとっての楽園

岐阜大学教育学部附属中学校　２年　田下　莉久

小学生の頃僕は父とかぶと虫を取りに森へでかけた。その夜は不気味な赤い月だった。静まりかえった森の中、じめっとしたきみょうな鳥の鳴き声が森全体に響いていた。僕は、たくさんのかぶと虫をとることができ、しあわせな気持ちだった。ふと、暗闇の中で僕の目の前を何かが横切った。その正体は「蛾」だった。手のひらほどの巨大な蛾が肩に止まり、おいはらっても僕をめがけてとんできたのだ。僕は、気持ちわるさを感じ、車へ逃げこんだ。車の中でほっとしていると「ガサッガサッ」という音が聞こえてきた。複数の蛾が窓にへばりついていたのだ。あの夜から、僕は蛾が嫌いになった。いや、ただ嫌いになったのではない。蛾を見るだけで、あの恐怖がよみがえる。僕は決めたのだ。絶対に蛾を撲滅させると。

僕は蛾の研究ができる大学に進むため、がむしゃらに勉強した。僕は蛾のいない世界を夢見ていた。あの忌まわしい出来事以来、夜になると常に蛾の気配を感じていた。夜、外を歩いていると蛾は音もなく僕の顔にむかってきた。部屋のカーテンを開けると、窓には蛾がびっしりへばりついていた。

大学に合格し、今まで僕につきまとってきた蛾から逃げるように、都会で暮らしはじめた。しかし、ここでも蛾はめざとく僕を見つけた。僕に平穏な日々は訪れない。蛾がいない楽園を作らなければ。

蛾の研究は順調だった。生態や行動の観察、飼育。様々な種類の蛾を採集した。蛾の方から僕に寄ってくるので、たくさんのデータを簡単に収集できた。そして僕は、ついに僕が蛾をひきよせる理由をつきとめた。

僕の体からは、メスの蛾と同じ「デリカシン」という成分が出ていたのだ。その成分を紙に吸出させることによって、蛾の生態を解明し、蛾を倒すことができるガスを作ることに成功した。喜びにひたる中、自分の部屋の書棚にある本、「世界の蛾」を開いた。その中の蛾でマダガスカルに住む「ニシキオオツバメ」が妙に気になった。僕はこの蛾を夢に見るようになった。あの

完成したガスで蛾を撲滅させる日はせまっていたが、撲滅させる前にこの蛾を見ることにした。

マダガスカルのジャングルは、広かった。何日もあてもなくさまよった。食料もつきあきらめかけた頃ジャングルの中に、天に向かうほのかな光を見つけた。導かれるように光のふもとに着くと、銀色にかがやき、ふわふわでつやつやのまゆを見つけた。僕は、そこにテントを張り、そのまゆを観察することにした。それから、二ヵ月後の夜、まゆの中から出ているまばゆい光に気がついた。それから何時間たったことだろうか。きらきらと輝くにじ色の羽を持ち、いかにも柔らかそうな体を持つ蛾が現れた。まちがいなく「ニシキオオツバメ」だった。実物は、何とも言えない美しさだった。

僕の楽園はその時変わった。蛾を撲滅させるのでなく、この美しい蛾と共にすごすと。僕は蛾の虜擒になった。ジャングルで生活しているうちに、この蛾以外にもたくさんのきれいな蛾が集まった。共に食事をし寝、きままに過ごす。そんな生活を何十年も過ごし、僕はとても幸せだった。今までのように蛾を研究することはなく、美しい蛾たちと一緒にすごす。ただそれだけ。

ある夜僕は、心臓が痛くなりはじめた。僕は、蛾に見守られながら静かに最後の時を過ごした。僕は、安らかなほほえみをたたえて逝ったのだ。

僕が死んだ後、このジャングルは、「ニシキオオツバメ」や他の美しい蛾の宝庫となった。そして、それらの蛾は人に見つかることなくジャングルで静かに過ごしたのだった。